

ナカジマ家の起親

tapi@shu

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——起親へチーチャ〜とは、麻雀用語ではデオヤという意味で、つまりは初めの親ということ。

人が自由に空を飛べば、それはまさしく異界の地。現実離れたファンタジーの世界では、地球で通じる常識は簡単に粉碎される。

中島煉夜へナカジマレンヤ〜はそんな摩訶不思議な地にて目を覚ました。

そんな何の力を持っていない煉夜は、不思議な光景に惑わされず、浮かれること無く、なんとかして自分の元居た世界の自分の居場所に帰ろうと志す。

これはナカジマ家が初めて地上へと降り立ったお話である。

※この作品は投稿サイト暁様とのマルチ投稿になっております。

目次

第三話	第二話	第一話
25	13	1

第一話

「はやてちゃんそれは？」

茶色の制服——陸士部隊である証の制服を着て、同じく明るい茶色の髪を一本にまとめた女性は、休憩室で一人本を読みふけているはやてに気安く話しかけた。

本を読んでいた女性は幾ばくかの間を置いてから視線を上げると、「ああ、なのはちゃんか」と言葉を零した。

なのはは、はやてが反応しない間に販売機で買った飲み物を片手に飲みながら、はやてに何を読んでいたか聞きながら、二つある内の一つを渡した。

はやては「ありがとな」とやや訛った言葉でお礼を言いながら、なのはの質問に応えるために読んでいた本の表紙を軽く見せた。

『無能で理想の隊長』？ 何かの指導書か何か？

「指導書というか、ドキュメンタリー本に近い感じやね。私の尊敬する部隊長の一生を描いた本なんよ」

「へえー。あ、それってもしかして地上本部の？」

「正解！ 誰よりも無能であることを嘆いた人の話。全く、あの人で無能だったら私は

どうなるんやろね」

そう言つてせせら笑うはやての表情に暗いものはない、どこか達観めいたものがあるのみ。この達観は諦めではなく、途方も無く高い目標（壁）にぶつかつてしまつているからなんだ、と長年の付き合いから読み取れた。

彼女が本当に自嘲する時は、なのはの目からでも感情の色が見えなくなる。それに比べ、今の彼女の表情はとても感情が読み取り安かつた。

「ナカジマ陸准将……スバルのおじいちゃんだよね？」

「つまり、私の師匠のお父さん。師匠の師匠に当たる人やね。そら、遠いわなあ」

はやてはガクツツと肩を見るからに落とした。

壁であると同時に尊敬の対象なのだろう。だからこそ、比べることに意味は無いと分かつていても、現在の自分と推し量りその差に打ちのめされてしまつてゐる。実際に一部隊を指揮する立場になつて、余計その差がはつきり見えてしまつたであろうことは想像に容易い。

普段であれば「はやてちゃんなら絶対出来るよ！」と精一杯に応援する所なのだが、自分自身にも身に覚えのあるような事柄だったので、無責任な事は言えなかつた。

最初に感じた壁。

それはなのはの全ての始まりになつた金髪の女の子——フェイトとの戦闘だつたか

もしれないが、魔導師として尊敬し壁だとはつきりと感じ、敗北を味合わされたのは短期入学した陸士訓練校のあの学校長だったかもしれない。

フェイトと二人で挑んだ模擬戦。お互いにAAAの魔導師ランクを超え、気のしれた間柄故に連携も駄目ではなかったはずだが、たった一人のAAランクの魔導師に負けられた。

今の私なら超えられるだろうか、と考えても苦い記憶もあつてか勝てるヴィジョンは容易くは構築させてはくれない。

ならやはり、はやての気持ちは痛いほど理解出来た。

簡単な問題ではない。

「でも、超えてみせる」

超えなくちゃあかんのやと言うその目には、灯火ではなく、燃え盛る野心の炎が宿っている。

「うん、私も——私たちも協力するから」

はやての手になのはは自分の手を重ねる。

この機動六課は大きな一歩。

「師匠の師匠も支援してくれてるんやから、六課を絶対成功させなあかんしな……」

再び肩を落とすはやてに、なのはは頼りなさ気に「にやはは」と苦笑した。

※※※

目が覚めて、路地裏と思わしき場所から出ればそこには、未知の光景が広がっていた。目にするものの全てが新しく見え、近未来的要素がふんだんに詰められたかのような、そんな都市の一部の光景だ。見渡す限りの高層ビルが並び立つその姿を見れば、ここが大都市であることに考える余地を与えさせない。

これが目新しい光景か？ 日本にだって東京や名古屋、大阪のような都市部に行けば高層ビルは所狭しと並んでいるだろう。なら、そう思うのは彼自身がそういった光景を実際に目にしたことがないからだろうか。

(大都市に来るのは初めてじゃないけど、ものすごく違和感を感じる……)

中島煉夜は高校卒業を機に地元である海鳴市から上京し、晴れて東京の大学へと受かることが叶った。その時には、予習と称して東京の名所を巡り歩き、『都会』というの地に足をつけて確認したはずなのだが、今の光景はそれとは全く未知の様相だった。

日本の都市部が劣っているのではなく、ここが、異質、であるのだ。建物の形が、この雰囲気が。

別段、建物が奇天烈な形をしている訳ではない。現実的かつあり得る造形なのだが、

どこか日本のそれとは異なっている。当然、雰囲気も違ったものになる。

ならばここは日本ではないのだろうか。

煉夜が知らないだけで、日本にこういう場所があるのかもしれないが、そもそも自分が居た海鳴市にはこんな場所がなかったのだ。つまり、自分がここにいる事自体が異常事態である。

今度は注意深く周囲を見渡してみると、雰囲気や違和感の正体が判明した。

それはレストラン風のお店の看板らしきものを見た時に気付いた。

「日本語、じゃない」

思わずこぼれ出たその声には恐怖と不安が交じり合っていた。

お店の名前が書かれているだろう場所には、全く見覚えのない文字が並んでいる。そこだけでなく、そこかしこにある文字の一切が全く解読不能の、見たことすらないものだ。

ここが日本じゃないのかもしれないという疑問は、ふつつつと湧いてきていたがこれではつきりとする。

ここは日本ではない。

とても信じられない、ありえないことだと思いつつも、目の前に突きつけられた事実をため息混じりに受け止めるしかない。

どうやら煉夜自身驚いたことだが、こういつた場面において逆に冷静さを保てる人間らしく、唐突に身に起きた不可思議に、頭は意外にも熱を帯びずにさめていった。

少しでも不自然を消化するために、自分が何故ここにいるのかという疑問は考えるも、瞬間移動といったような、当たるはずもない仮説しか生まれえない。そんな仮説は不自然に不自然を上乗りするだけの、何の意味も持たないものだった。

海鳴市からここに来るまでの経緯を思い出そうとするものの、どうも頭を打ったのか、記憶が漠然として、目を覚ます前の記憶を思い出せない。

(突発的に、地震みたいな揺れがあったのまでは思い出せるんだけど)

その記憶を最後に、次の記憶はこの見慣れない景色であった。

いつまでも突っ立っていても仕方ないと、地面と睨めっこしていた顔を上げ、そこに新たに目にしたは、

「ふあ、ふあんたじー……」

翼も無しに空を飛ぶ人間の姿だった。

見慣れない光景、見たことのない文字だけなら、ここがまだ自分の知らない土地で、地球のどこかという推測が表に立つ。そもそも、突然そんなところにいる事自体が、おかしな事ではあるが今更そこを考えたところで結論は出ないので、置いておく。

重要なのはそこからどうやって自分の故郷へと帰るか。

お金が必要になると何よりも先に思いつくのは、いやらしくとも現代社会に生きる性なのかもしれない。お金により交通手段を手に入れて、素早く元の場所へと帰ることが叶う。時間がかからず、代価は金銭だけで、最も理想的といえる。

手元にあるのは、ポケットの財布入った一万円札と千円札と小銭が少々。国内なら帰るのに不安はあるものの、十分に間に合うお金だが。

(国外なら、国によつては帰れるかななんて思つてたけど、これはさすがに)

望みの欠片もない、煉夜はそう思わざるを得なかつた。

煉夜が普段過ごしていた地球では、常識として生身の人間が空を飛ぶことなど夢でしかない。現実では大きな翼を持つた箱舟で、空を行き来するのが常識だが、その常識は脆くも砕け散つた。

何かの秘密組織が、秘密裏に開発した平気か何かと言われたほうが、まだ納得のいく光景だった。どっかの宇宙船を開発する某企業なんかは黒い噂が絶えないことでもある。

無理矢理に価値観を自分の元いた世界と辻褄を合わせようとするものの、感じる違和感は拭えない——ここは元いた世界とは違う場所。そう認めなければいけない決定的な光景であつた。

変わらず絶望的な状況下だ。

何をするにも金が必要であった地球では、とりあえずお金があれば解決することは山ほどある。お金に頼れなければ公安という、最悪の状況では助けにもなってくれらう組織だってある。本当に助けてくれるかは怪しいが、泣いて喚いて諦めずに救いを請えば、まあなんとかなるだろうと思う。それこそ砂漠の真ん中で置き去りにされるような、すぐさま命の危機に陥るような場所であれば助かる算段はつく。

ならば、この状況は絶望的ではないのか？

人はいる。ここにずっと突っ立っているせいも、周囲の好奇の目は肌に痛い、それが直接命を削ることはない。代わりに精神は削られているが、気にしていられない。

人がいるということは、助けを求める事ができるということだ。
なるほど、絶望とは程遠いのもかもしれない。

だが、現実には違うのだ。

自分が故郷に帰る算段がつかない点では、やはり絶望に等しい環境である。

普通の人間なら、こんな状況に置かれたらどうなるだろう。

狂ってしまったのかもしれない、と考えるのか。

目の前の現実が、確かに眼を開けて見ているはずの事実が、どうにも現実離れをし、現実味を帯びていない。

狂った結果、こんな妄想染みた、無駄に現実感のある世界を自分の脳内に創りだしてしまったのではないか。

しかし、煉夜は中途半端に強い芯があってしまった。

『これは夢だ。現実ではない。今、自分はあり得ないほどリアルな夢を見ているのだ』と、逃避できれば心の安静は保てるはずなのに、冷めてしまい、覚めてしまった自分は、これが現実であると冷酷にも告げている。

いつそ、狂ってしまったていれば楽だったかもしれない。

見なくていいリアルを、遠く意識の彼方に置き去り、ここでは夢であると信じて、或いは狂じて、第二の人生を送っているかのような、ゲーム感覚でいられたかもしれない。なんて楽なことだろうか。

考えずして、自由気ままに生きて、死んでもきつと元の場所へと帰るだけで、何の不利もないと不安も恐怖も感じずに終われたかもしれないのに。

しかし、煉夜は中途半端にリアルリストだった。

ここは夢だ夢だと己に嘘を信じこませようとも、心の奥底は、彼の脳はそれを否定し、切に現実だと訴えかけるのだから。

だからこそ、絶望的な状況下において、煉夜の心は絶望しきれていなかった。

どこかに帰る方法があるのではないかと甘い願望と期待を賭けずにはいられない。

つまるところ煉夜は、

(夢も希望もない話は大好きだからね)

簡単に諦めることをせず、状況に屈することも絶対にしなない、自分のハッピーエンドがねじ曲げられるのをとにかく嫌う我儘な性格の持ち主であった。

ここはどこですか、と素直に問うことは常識的には非常におかしい。自分の居場所が分からないなどは、笑い草ではなく変人か迷子の扱いになる。迷子と勝手に捉えられれば、面倒が嫌いな人であれば、迷子を預けられるような場所を教えてくれるだろうし、世話好きな人なら親切にも行き先へ案内してくれるだろう。

迷子として預けられた場合は、同じく行き先を問われたりするか、もしくは不審な点があれば身元を疑われたりするかもしれない。煉夜の居た世界の警察なら、まず間違いなく身元確認から始まりそうだ。

行き先はどこか、と聞かれたらどう答えればいいのか。

「日本です」これが通じれば幸い、通じなければ「は？」と疑心を向けられる。この世界に行き先などないのだから、どこに行くかを聞かれれば、その時点で色々問題発生。不審者と思われれば、この世界の警察的な存在に囚われて、ゲームオーバーだってありえる。

その時の言い訳はどうすればいい？

「異世界から来ました」か？

馬鹿げている。そんなもの一体誰が信じるというのだ。

(待てよ。空を飛ぶ人間がいるんだから、俺の常識が通じないんじゃない)

魔法だか、超能力だかは分からないが、超常現象が人の身で可能な世界なら、「異世界から来ました」の言い訳も、実はこの世界基準では十分にありえることなのではないだろうか。

SFなんかでよくある話を思い出す。

地球以外にも知的生命体は実は存在し、地球側からは認知してなくても、彼らはすでに地球のことを知っている。こんな話は意外とありふれている。

同じように、地球側からすれば、異世界は存在しないが、異世界側からはすでに地球のことを知っているのかもしれない。

地球にいる時はこんな戯言、妄想は到底信じられるようなものではなかったが、地球の常識を覆す光景を見た後では、あながちありえないことではないと思えてくる。

そう考えると行動は早かった。

道行く人たちに目配りをして、ターゲットを決める。

大人よりも子供の方がいい。子供は素直だ。聞かれたら、素直に答えを返してくれ

る。

調度良く、煉夜の目の前を一人の幼い少女が通った。

背は非常に低く、煉夜の居た日本であれば小学生低学年の背丈の少女だった。

煉夜は慌てて、その少女に声を掛けようとして——意識が暗転した。

第二話

「幸運なんです、ラッキーなんですよ」と彼女は煉夜に行なつた暴挙を誤魔化すように言った。

幸運とは何なのか。

彼女のような子に拾つて貰えたことだろうか。確かに彼女は将来は美人になるだろう。常に輝いて見える銀色の髪はそれだけで宝石に並ぶ価値があつても不思議ではない。顔の造作は、全面的に幼さが目立つが、その髪と同じ色の眉毛はキリツと整えられて凛々しく、くりつとしたエメラルドの瞳からはあどけなさや凛々しさを感じさせる。今はまだ幼くとも、将来は美人になるのは確定的に明らかだろう。

そんな彼女に出会えたことが幸運じゃないかといえは、幸運の部類に入るのだろう。そう思つた煉夜は、「君に会えたことが幸運？」と率直に返せば、彼女は顔を赤らめて、慌てたように言う。

「な、なんで私に会えたことなんですか?! 違いますよ。無事なことです。五体満足なことです。あと私のことはノアと呼んでくれて構いません。シルエツトだと姉と被るので」

「じゃあノアちゃんに殴られて、気絶だけで済んだことか」

「それは忘れてください、今すぐに」

拳を強く握り締めるノアを見れば、煉夜は忘れることに精を出すしかないが、そもそもこんな見たため幼い、小学校低学年のような少女に殴られて気絶したことは、煉夜自身にとつてもあまりいい記憶とはいえない。積極的に忘れることにした。

成人間近に控えた男が情けないと思うところが、精神上の安定を得ることに成功する。なら、それもまた致し方なしと思うことで、精神上の安定を得ることに成功する。

ノアちゃんは冗談が通じないなあなんて軽口を煉夜が叩けば、ノアはいちいち煉夜が悪いと反応した。

「そのノアちゃんって呼ぶのもやめてくれませんか。私はこれでも十一歳です」

「え……十一歳？」

そうは見えないと言いつつ口を慌てて閉じる。言ったら殴るぞとノアの視線から並々ならぬ何かを感じ取ったからだ。

十一といえば連夜の世界で言えば、小学校五年か六年に当たる。煉夜が想像していた見た目からの年齢は小学校二年か三年の程。その差が大したことないと言うなかれ、この年代は成長期であり、一つの歳の差は、非常に大きい。身長で言えば二十も三十も、それ以上もの差が出るのだ。

ノアが小学校低学年程度と決めつけていたのは、近所に住む知り合いの一番下の妹が、ちようどノアと同じくらいの背丈の時に、低学年であったからだだった。

(そうか。地球(日本)の常識が、こっちの常識であるはずはないし)

この世界では、彼女くらいの年齢でこの背丈は普通であるのかもしれない。つい自分の基準で測ってしまった煉夜は、ノアに謝るべく口を開こうとすれば、ノアが先んじて煉夜を遮る。

「二応言っておきますけど、私のこれは……大変言いたくないことですけど、この世界の標準ではないですから、勘違いしないでください」

認めたくないことですけど、事実ですし、と最後は苦々しい表情をした。

それならそれで気にしていることを言わせてしまったことに、謝罪をしようとすれば、ノアは哀れになるからと言い、謝ることも許さなかった。

それからしばし、にらみ合いとも様子見とも言うべく空白が生まれてから、ノアがため息を吐いた。

「話が逸れすぎてしまいました。私のことはいいんです」

「いやいや、傷つけたならちゃんと謝らなくちゃ——」

「いいんです！ 気持ちには分かりましたから……」

ノアはもう一度深く息を吐き、テーブルを挟んで座っている煉夜に、ズイツとテーブ

ルの上に身を乗り出し、エメラルドの瞳が覗きこんでくる。

曰く、私のことよりもあなたはあなたのことを心配しないといけない、と。

図らずして異世界へと足を踏み入れた者、望むべくもなく自分の住んでいる次元以外へと訪れてしまった者を『次元漂流者』と呼び、煉夜はそれに当てはまるのだという。彼女の憶測では、煉夜がこの世界——ミッドチルダで目覚める前に起きた地震が大きく影響しているらしい。

奇しくも煉夜の予測とそこまでは同じで、それを聞いた時、煉夜の中ではやっぱりという思いが強く、意外とは思わなかった。

彼女は更に言う。

その地震はおそらく次元災害と呼ばれる現象で、その一種である次元震であった可能性が高い、と。

「次元災害？ 聞いたことがないんだけど……」

「……だと思えます。ここまで話して気付きましたが、レンヤさんの世界では魔法が常識ではないのではないのでしょうか？」

「魔法!? そんなものある訳が——あー、なるほど。あれが魔法だったのか」

ある訳がないと叫ぼうとして、浮かんだのはこの世界が居世界であると気付くきっかけになった空飛ぶ人の光景。

魔法、そうあれが魔法と言われれば、これほど納得のいく言葉はないだろう。

翼もなしに空を飛ぶなど、魔法紛いだなと連夜は呑気にも思っていたが、その言葉が射を射ていたようだ。

「驚かないんですね」

煉夜がいたって平静を保っていたことに、逆にノアが驚きを示したようだ。

「自分でも驚くほど、冷静でいられるんだよね。窮地にこそ人の本性が現れるというから、俺は本当は冷静沈着な人間なのかな、なんて思うくらい」

「冗談を言えるくらい余裕が有るようで何よりです」

「……でも、なんで俺の世界に魔法がないなんて分かったんだ？」

煉夜は確かにここまでの経緯は全てノアに話したが、魔法の話は何一つとしてしていなかった。むしろ、魔法が無いことが前提の世界で生きてきた訳だから、会話の中に魔法が出てくる事自体がおかしい。

彼女が何故、煉夜が魔法のない世界であると当てることが出来たか不思議に思うと、ノアはニツコリと出来の良い生徒に対するような笑みを見せて、「簡単ですよ」と人差し指を立てる。

『「気付いたら異世界に居た」なんて言い方は、魔法のある世界ではそうそうありません。なぜなら、魔法の存在する世界は、そのほとんどが管理局の管理下か認知下であるから

なんです。まして次元災害を知らないのは魔法がない証拠……なんですが」

話の途中で胸を張るも、最後の言葉とともに、煉夜に心配そうな顔を向けた。その顔には暗に、話の意味が分からないですよねと言っているようだった。

自分よりも七歳も若い少女にそういう顔をされると、彼女にはその気はなくとも、どこか自分が低く見られているように感じてしまうのが普通なのだろうが、不思議とそんな気はしなかった。それは彼女から感じる理性とも知性とも言える利己的な雰囲気こそうさせるのか、相手の思い遣りを含めている声色にあるのかは分からないが、これが彼女の魅力の一つであると煉夜は思った。

煉夜は心配させないようにと小さな子によくするように頭を撫でようとしたが、伸ばした手を留める。彼女はただの小さな子ではないとようやく理解したからだ。

撫でる代わりに、煉夜は曖昧な笑みを浮かべる。

「まあ分からないことが多かつたけど、なんとなく理由は察せれたかな。それで次元災害の続きなんだけど」

「あ、はい。そうでしたね。詳しく説明する必要はないと思いますので簡単に言いますと、空間を断絶する地震ででしょうか」

「空間を断絶、ね」

「はい。なんでそんなのが魔法のない世界で起きたかは、さすがに分かりませんが、その

開いた空間にレンヤさんが運悪く落ちて、このミッドチルダに運良く着いてしまった。というのが、一番辻褄が合うと思うんです」

空間を断絶だかなんだかは煉夜に言われてもさっぱりだったが、あの地震が原因であるのどうやら間違いないらしい。むしろ、他の要因に思い当たらないので、そう言われる方がずっと頭の中に入ってくる。まさしく辻褄が合うからである。

「それで何が幸運かという。次元の穴とでも言うべきなんですかね。そんな底なしの穴みたいな場所に落ちて、無事に生きて出られただけでなく、このミッドチルダ——ようにするに、普通に人が生活しているところに辿り着くなんてラッキーという以外にありませんよ。だからこれも」

それから彼女は冗談めかしに、イタズラっぽい笑顔を浮かべて言った。

——あなたと私の出会いも、『奇跡』なんて言えるのかもしれないね

まさか、真剣に女の子に見惚れる日が来ようとは、異世界に来るまで煉夜は考えたこともなかった。

※ ※ ※

次元の空間はブラックボックスに等しい。中でも虚数空間と呼ばれる次元の抜け落

ちた場所などは、全く検討もつかない謎の空間で、魔法も一切発動できないためか研究の手もつけることも出来やしないという。

煉夜はそんな、何が起こるかわからない次元層へと落とされてここへやってきたのなら、『助かった』以上の幸運を望むのは贅沢とも言うべきであるのは十分に理解できた。ノアの説明を受け、ようやく幸運であるとの言葉を正しく消化できるようになった。

彼女の言う通りなのだ。

生きているだけで、煉夜は満足するべきなのだ。

しかし、人間という常に欲を欲する生き物はそうはいかず、一つの希望が叶えば、もう一つの希望、もう二つの願いを叶えて欲しくなる。煉夜で言うところのもう一つの希望と言えば、言うまでもなく元の世界への帰還を置いて他にない。

「次元を渡る方法はありません」

その言葉に煉夜に思わず笑顔が溢れる。

どうやら自分で思っていた以上に、故郷へ帰ることを切望していたようだ。

煉夜の表情が明るくなる一方で、ノアの表情にやや影が刺し、煉夜の様子を窺うようにおおずおと口を開く。

「次元を渡るには主に移転魔法が必要で、それが可能なのは次元移転装置か高次元の移転魔法が出来る魔導師です」

魔導師というのは魔法を使う者で、地球で言う魔法使いのような者らしい。どちらにしろ、煉夜に未知の存在であるのには変わらない。

「平時であれば、次元漂流者であることを証明できれば次元移転装置を使わせてくれたかもしれません」

ノアは続けて言う。

民間では現在の状況だと、とてつもない高額な料金を払わなければいけないので、そちらの線ではまず不可能。

地球で例えるなら金持ちの道楽で宇宙旅行をするようなものだと言った。

魔導師による移転は論外だとノアは断言する。

高次元を渡らせることが出来る魔導師は、非常に稀で、それほどの力を持っているなら、ただの一般人のために、協力をしてくれる暇があるはずもない、と。

「ところで、平時であればって言うのは？」

「皆さん……忙しいですから」

遠い場所を見ながら、物憂げに言った言葉で一度話を切ると、先程よりもなお暗い表情を浮かべる。

すうーと息を吸い込む音が聞こえると、彼女は今日一番の真剣な声色で、尋ねてくる。「覚悟がありますか？」

「覚悟？」

ノアの真意を図りかねて、疑問で返す形となったが、彼女は一度大きく頷くと、何を聞いても心を保つ覚悟があるかと問う。

煉夜はノアの今までにない真剣な空気に飲まれかけていた。いたずらっぽく笑った時は立派な女性を感じ、からかい混じりで会話した時は子供っぽく拗ねたノアの、これまでにない人を圧迫する並々ならぬ雰囲気だった。

彼女の息遣いまで聞こえそうなほど、緊張感が高まると、黙っていることが辛くなり、煉夜は大きく深呼吸をした。

「レンヤさん？」

煉夜の突発的な行動に、ノアは訝しむような目を向けてきたが、連夜はそれにニヤリと笑顔を見せた。

「大丈夫。こう見えても肝が座ってるんだ、俺は」

えっへんと今度は煉夜が胸を張る番だった。

その煉夜の気丈な姿を見て、何が面白かったのか、張り詰めた空間がクスツという小さな音によって弾け飛んだ。

突然笑い出したノアに、煉夜が啞然とした表情をすると、彼女は一言「ごめんなさいと、説得力の欠片もない笑いながらの謝罪をした。

「なんだよ」

「いえ、レンヤさんみたいな人を空気を読めない人だということのかなと思ったら、つい」

そう言つて、ノアはもう一度笑いをこぼす。

「それ褒めてないだろ」

煉夜がジト目で責めるように言えば、

「上官には大切なスキルだつて聞いたことがありますよ」

なのでレンヤさんはきつといい上官になりますね、とやんわりと返す。

ノアの何とも言えない発言に、煉夜は複雑な心境を抱くと、顔にも出ていたからか、ノアがフォローのつもりなのか「褒めてるんですよ」と間延びした、褒める気がないのが誰にも目に明らかかな言葉。

二人で褒めてないだろ、褒めてます、褒めてないだろ、褒めてますつてと、何度かやり取りをすると、ノアが不意に真剣な表情に戻る。

「これなら大丈夫そうですね」

「だから大丈夫だつて。それで、覚悟が必要な内容つてのは」

「はい、それは……」

一呼吸置いて、エメラルドが煉夜の瞳を釘付けて言う。

「レンヤさんの世界は、もしかしたらもう無くなっている可能性があります」

煉夜はそれに、なるほどと呟くと沈黙を築いた。

第三話

あてがわれたベッドに身を沈める。

予想外の出来事の数々で身体に思った以上の負担を強い、腕一本を動かすことさえもだるく感じる。ベッドへ身を委ねると自然と瞼は閉じられたのだが、それ以後が訪れない。

体を休ませろと心は言うのに、頭はまだ考えるのをやめるなど告げているようだった。

興奮のせいで寝れないことは何度も経験があった。

明日が修学旅行などで楽しみで眠れない夜や、人生を左右する受験に緊張で眠れない夜。早く寝たいのにと焦燥はあるのに、はやればやるほど脳は活発していった。

同じ眠れなさを感じているのに、今までのそれと全く違う冴え方をしている。

楽しみがないとは言わない。異世界へ来て、見慣れぬ光景を見て、ファンタジーを体感すれば、夢見る男子なら血が騒ぐのは止められない。

だが、それが理由で眠れないわけではない。

緊張は当然ある。自分の部屋以外で寝る行為自体がそもそも異空間におけるそれで、

手馴れない以上に違和感を禁じ得ない。眠れない大きな理由ではあるのだろう。いつもと違う枕では寝付きにくいのと一緒で。

だが、それが頭が冴えている理由ではないのだ。

心が不安によつて摩耗し、体は疲労感を拭えなくても、冷えすぎた頭がまだ休まる時ではないと叱咤している。

素直に寝れないならいつそのこと、考え尽くすのも一興かもしれない。

判断材料は、色々と手助けしてくれたノアから得ている。

(何を考えるべきってまずは自分の家に帰る方法だとは思うんだけど)

帰る方法は以外にも簡単に出た。あとはその手段をどのようにして得るかであるが、それもどうやら『お金』が必要になりそうな雰囲気であった。

方法の一つは、魔導師と呼ばれる、所謂魔法使い。それもとびきりに上級の魔法使いじゃないと異世界への扉は開けられない。運良く知り合うことは、現状では不可能と見る。

方法その二は、まさしく金銭問題。ノアの言った『皆さん忙しいの意味』の意味は何となく察するからに、現状は煉夜のような次元漂流者——迷子の受付はやってないとのこと。時限装置自体は買うことも、幾つかの条件さえ満たせば不可能ではないとのことなので、煉夜としては『世の中は金が正義か』とぼやくのも致し方ないことだ。

今すぐに帰れるなら帰りたいと思う反面、ちよつとはこの世界を満喫してみてもいいのではないかと思う心は当然ある。言うなれば、強制的に今すぐ帰ることが出来ないこの立場は好意的に見ることも可能でもある。

(ネガティブよりはマシなはず)

実に都合のいい落とし所。

かくして帰ることは不可能ではないと結論付けた所で、更に根深いところに問題があることを放置してはならなかった。

むしろ、ここまでの思考はある前提を基に建てられている。

当たり前であり、煉夜にとつては無くてならならぬ前提であるそれは。

(地球が無くなつてゐる可能性……だよ。考えたくはないな)

思う言葉は軽くとも、のしかかかってきた不安は想像以上に重たい。

家族もろとも、自分以外の全てが消えてしまつているかもしれないと思うと不安は募るばかりで、悲しみは一向に湧き出ない。おそらく、実感が伴わないからだろう。

意味合いは理解できるし、どういふことになつても想像はつくのだが、目の当たりにしていないだけで、こうも感情に違いが出るものなのか。

ノアに可能性を示唆されただけで、事実として認識していないのも大きいのかもしれない。これが新聞の一面にでも確固たる物として取り上げられた後、死亡者一覧に家族

の文字があればまだ実感も出てくるというものだ。

言うまでもなく、そんなことは想像するのも嫌であるが、最悪を想定して、今後の身の振り方を考えなくてはいけない境遇では、考えないところが現実逃避と言える。

順序が逆。帰れる場所がないなら、帰るための方法を思案しても意味が無いのだ。帰れない事も考えて、行動するにはやはり……………

「先立つもの？　つまりあれですか、お金を要求してるんですか？　私に？」

ノアはちゃんちゃらおかしいとせせら笑った。下卑た笑いとも取れるそれは、明らかに煉夜に対する見下しと蔑みが混じる。

「待ってノアちゃん、君は大きな勘違いをしている」

罵声が飛びかねない彼女の態度から、慌てて手を振り、二の句を告げる前にノアの認識が間違っていることを訂正しようとすれば、その静止にも関わらず彼女は鼻で笑う。

「勘違い？　勘違いなんてしてないですよ」

と、今度は椅子の上に立って、物理的に見下してくる。言葉は丁寧でも含むニュアンスに優しさの欠片はなかった。

しかし、どうにも椅子の上に立ったことで、背の小ささが余計に露見しているように連夜には思える上に、どうにもノアのその必死な行動が、ちっちゃい子供の背伸びのよう

に見えて仕方ない。

煉夜とノアの關係がノアの一方的な早とちりで悪化しそうな局面だというのに、ノアの行動に可愛いと不覺にも見惚れてしまった。

自分に幼女趣味はない……はずである。

「あ、今、私に対して失礼なことを考えましたね」

「な！ 言い掛かりはやめてくれよ！」

「いいえ、私の勘違いじゃないです。ぜつつつたいに思っていました！」

ノアは侮蔑を含んだ表情から一転、頬を膨らませ怒りへと変わる。

話をそらすことに成功したが、進めることには失敗してしまったようだ。

怒り心頭といったノアの怒りが完全に沈下するまで、ただ待つているだけでは日が暮れかねない。今もまた、どうしたもんかと頭を悩ませる煉夜を頭上から「ねえ、聞いてますか」とかなり強い口調で怒りを顕わにしている。

何故そこまで怒るのが、イマイチ納得しきれない煉夜はノアに疑問を直接投げれば。

「大体予想がついてしまうんです。私に対して、幼いだとか考えてたつてことは！」

「予想だけでこんな怒られるなんて、そんなのあんまりだ！」

心外だ。八つ当たりだとあくまで連夜は身の潔白を表情を全面に押し出して主張する。

本当のところは有罪であるからして、少女の勘の鋭さに驚愕を禁じえない。驚きを表情に出しては、自白しているようなので、驚きを表情に出さないように内心のみで抱く。にらめっこを続けてもなんも利益を得られないので、煉夜がため息を付いた。

「しようがない。俺が悪かったから、機嫌を直してくれ」

仕方ない雰囲気を出しつつそう言うって大人の対応をとれば、ノアが小さく「……そう
いうのは、ずるいと思います」と呟いて、縮こまりながら椅子に座った。

「職を探そうと思うんだ」

「……………はい」

煉夜の真剣な表情に押されて、ノアもその言葉の重みを分かっているからこそ思いつめた表情で返す。

「別に帰ることを諦めたとかじゃないんだ。昨日、ノアちゃんに言われたように自分の星、帰る場所が無くなって可能性は確かにあると思う」

無くなってる可能性のほうが高いのも分かっている。

未曾有の大災害になってると考えるのが妥当なのだ。いくら震災に強く、慣れている日本という国であっても、原因が科学的に解明されている以外のものではあれば、解決するのは難しい。魔法なんて概念は表沙汰には認められていないのだから。

こうやって異世界が存在したのだから、実はオカルト的な機関も裏にはあるのかもし

れないが、常識的な判断としてはやはり手遅れになっていると思うのが普通なのだ。

日本だけの問題ではなく、そもそも世界の危機に瀕している可能性だつて否定しきれない。

「それでもやつぱり、俺は帰りたいたいんだ。家族だっているし、友達だっている。昨晚さ。借りたベッドで考えたら家ついていいなって思い始めちゃつてさ」

「軽々しく言えないですけど、気持ちは分かります。私も、お姉ちゃんもお父さんもお母さんも好きですから」

物憂げに、歳相応とは思えない悲観的な表情でノアは答えた。

「あー、ごめん。別にノアちゃんに辛いことを言おうとかそんなんじゃないんだ。だから、その……泣きそうな顔は出来ればやめて欲しいかなつて」

ノアは「すみません」と消え入りそうな声で言い、指で軽く目尻を拭った。

「ポジティブに、そう、ポジティブに捉えることにしたんだ」

「前向きに考えたつてことですか？」

不思議そうな視線を煉夜は受ける。

実際、事ここに至つて自身のこの考え方は意外と特殊なのだろうと自覚はあつた。塞ぎこむのは性に合わない。それもあつたが、それ以上にこの少女の前では見栄を張りた
い自分が居た。

「向こうに居たつていつかは就職するのだし、就職先が国内か国外かの違いか、早いか遅いかにすぎないんじゃないかってね」

今すぐにはどちらにしる家族には会えないとなれば、機会をじつと待つか、己で掴むようにするしかないと煉夜は考えたのだ。可能性はあくまで捨てない。希望を捨ててしまえば、平常を保つていられる自信もない。

今はただ単純に、どうすれば生き残ることが出来るかだけを考える。

それでいて、煉夜の望みを叶えられそうな仕事といえば。

「だから、俺は管理局員になる」

「……道理、ですな」

一石二鳥だろ、と煉夜は会心の笑みを浮かべる。

元々は、向こうの世界でも公務員になる予定だった。しがたない地方公務員でそつなく仕事をこなし、適度にお金を稼げて、などと甘い蜜を吸う夢ばかり見ていた。

それが、そんな面白げもない未来予想図に予想外な色が混ざり、少々面白いとさえ煉夜は思っていた。魔法の存在するこの世界で、例え自身は魔法を使えなくても、触れる機会が増える。たったそれだけで、胸が踊るのを感じている。

理にも適っている。

ノアの言う通りならば帰る方法は二つしか無く、それぞれの方法が人脈とお金と権力

で事が済むものでもある。

それらが手に入るのは商業か管理局になるだろう。

単純に次元移転装置か管理局に深く携わっていたりすれば商業でも使える機会は巡ってくるだろうと思えるし、あとは金策的な意味合いを多く含む。

管理局はもつと直線的だ。局員になれば使う機会は、自ずと現れるはず。

その考えをノアに打ち明けると、彼女も否定はせず、局員になるのは手っ取り早い方法であると頷いた。

——もう一度だけでいいから家族や友人と顔を合わせたい。

偽りのない煉夜の本音。

春先には大学生になる予定だった彼は、上京を決意し、それを実行する程度には自立心は高く、今更、親元や旧知に会えないからと泣き喚くわけではなかったが、それでも安否を確認したい想いは強い。

生きているか死んでいるか。それがはつきりするまでは、涙一粒を零すのすら惜しい。

「勉強が必要ですよ」

「そら、公務員なんだから試験があるわな」

当たり前だ。すでに鬼のような勉強が必要な覚悟はできている。

「魔力のないあなたでは役職が限られますよ？」

「魔法のある世界なのだから、魔力無しには辛い世界なのは、なんとなく察してる」
よくある話だと煉夜は思う。

ないよりはある力。魔法がこの世界でどれだけ優遇されているかはまだ煉夜には分からないが、最初からない力よりは、何かしらの力がある方がいいに決まっている。

「本当に分かっては……やっぱいいいです。あなたが本当に目指すのであればそのうち分かることですから」

ノアは言葉を濁し、何かを含めた言い様ではあったが、特に煉夜に追求せずに息を吐く。

中途半端なノアの態度に、煉夜がむっとして「なんだよ」と聞けば、ノアは首を横に振り「いいえ」と答えるのを避けた。

「それで結局は、どうしたいんですか？ 管理局に入るにしても、目指すものをもっと具体的に決めないと」

「ああ、それなんだが」

煉夜は溜め込んでいた考えの全てをノアに包み隠さず話した。

彼女の協力は煉夜の目的を達成するのに必要であったし、これが一宿一飯の恩義でもあると思ったからだ。殴って気絶させたから、という理由の割りには十分以上にもてな

してくれているし、何よりこの家を追い出されれば、行く先はない。

管理局の庇護下に入るのももちろん視野に入れたが、それは煉夜の自由を保証するものではない。体よく元の世界へ返してくれるなら、笑ってそれも出来るのだが、戻る世界を失ったとしたら、どうなるか分からない。

孤児院のようにどこぞの里親に出されるのかもしれない。煉夜の年齢的にはそれも厳しい。なら、管理局員としてしごかれる未来も想像したが、魔力のない煉夜はただ事務員としてきき使われる未来しかない。

それでも悪くない、と思う反面、野心が異世界という地に来て沸々と湧いてくるのを感じていた。

帰りたい気持ちと、ここで何かをしたい願望。相反し、交わらないような複雑であって単純な二重螺旋のような心境だが、不思議と煉夜の中では矛盾してると思わなかった。

「それで先立つ物ですか」

「俺への投資だと思ってるさ」

「会ってから二日しか経ってない人に投資しろと言うのですね」

「将来、俺がノアちゃんを雇ってあげるからさ」

「この通りとお決まりのポーズをして、お願い倒す。」

小さい女の子に必死に懇願している青年の図は、ひたすら情けないものであつたは、煉夜にはこれしかなかつた。

「しようがないですね。拾つたものには責任を持ちなさいと言われて育ちましたから」
「ものつて……」

「今のあなたにはその程度の価値でしょう。あなたの境遇には同情するものがあります
が、それ以外の選択肢だつてあつたのですから」

管理局員になるだけであるなら、今の管理局においてそれほど難しいものではない。
それを、それでは物足りないからと贅沢を言つたのは紛れもなく煉夜なのだ。

ノアの了承の言葉に、何度も感謝の礼をする煉夜。

「——あなたに期待してもいいのですね」

それは煉夜の耳にも届かず、彼女が手元に小さく出現させた異端（ベルカ）の魔法陣
は、そつと消えた。